パープル・すみれ団の混乱

アン・シャーリー

【一日目】

パープル・すみれ団(※1)の連中が、あのプリズムリバー楽団の解散騒動のときになにをしていたか、について語るなら、まずはパチュリー・ノーレッジの話からはじめるのがよいだろう。

その日、パチュリーは魔法の森へ出かけていた。魔女は魔法の森に家庭菜園をもっており、そこでキャベツを育てていたのだ。その春は気候がよく、キャベツはとてもおいしそうに育った。まるまるとしたキャベツをいくつもかごに入れて、ほくほく顔で帰る途中で、解散会見をした直後のルナサ・プリズムリバーに出くわした。

ルナサがそこでなにをしていたのか、パチュリーとどんな会話をしたのか、ということは、他のだれかがもう書いているだろうから、ここでは繰り返さない。ただ読者に知っておいてほしいのは、魔女はプリズムリバー楽団の大ファンで、だから解散の事実にとてもショックを受けたのだし、それにもともと彼女はコミュ障だ。だから、ルナサ相手にうまく会話できなくたって当然なんだ、ということだ。

プリバの解散と、ルナサ相手にうまくしゃべれなかったことで、収穫の喜びなんか吹っ飛んだ。それでパチェはまっすぐ家に帰りたくなくなって、手近な友人の家に寄ることにした。そこからすぐ近くに住んでいて、傷心の自分をなぐさめてくれる気安い相手、というと、今回の場合霧雨魔理沙ではなくって、アリス・マーガトロイドのほうだった。

ぴんぽーん、ぴんぽーん、とインターフォンを鳴らすと、すぐにアリスが出てきた。アポなしの訪問にもかかわらず、アリスは友人を快く迎えてくれた。出てきたお茶を飲んで一息つくと、いろいろ話したくなった。いろいろ、というのは当然ながら、プリズムリバー楽団についてのいろいろだ。

「残念ね」と、アリス。アリスの端的な感想を聞いて、パチュリーはため息をついた。

アリスはアリスなりに残念に思っているのだろうが、パチュリーの失望ときたら、なかなか言葉にあらわせるものではなかった。胸の奥にどろどろしたマグマのようなものがたまり、熱くて苦しいから吐き出そうとすると、マグマはとたんに冷えて固まり、金属製の棘が付いたイガイガになってしまい、喉につっかえて出てこず、で、けっきょくなにも話せなくなってしまう。

通常、こういう相手とお茶を飲むのは疲れるものだが、アリスはパチェに慣れており、また彼女自身パチェを超える一流のコミュ障であったため、とくになに